

昭和22年4月九州地方に發生した 麥の寒害に就いて

農林省農事試験場九州支場 藤 吉 正 記

- 一、實地踏査の資料並に各縣よりの調査報告等を基として主として被害と環境（氣象、地形、方位標高、品種等）との關係を含味した。
- 二、被害の様相は主として稔實障害であり、穎花の外部形態は一應整つたものである。出穂障害は一部高冷地に發生した（大分縣）。
- 三、氣象との關係に就ては作物に於ては節間伸長後の著しい高温により生育が促進され、氣象に於ては異狀に遅れて晩霜が襲來した爲（4月23日及24日）著しい被害が發生したと考へられる。
- 四、被害地域は九州各縣に亘るが發生地帯は或特定の場所に限られてゐる。
 - (1) 比較的標高の高い地帯の盆地、臺地（日田、球磨等）
 - (2) 平坦部の河川の流域（筑後川、菊地川、嘉瀬川等）
 - (3) 高冷地帯の溪谷（大分縣森町附近、大野川上流等）
 - (4) 冷氣流の通路（佐賀縣東松浦郡嚴木村と相知町との境）同じ發生地帯でも局部的に發生を見ない場所もある即ち河床、溜池の周邊、北に地物を負ひ南面に展けた場所等は少い。
- 五、品種間の絶對的抵抗性の差異は明でないが、早晚性による被害程度の差異は明瞭である。早生の農林20號は最も被害が著しい。大麥は小麥より抵抗性が大の様である。